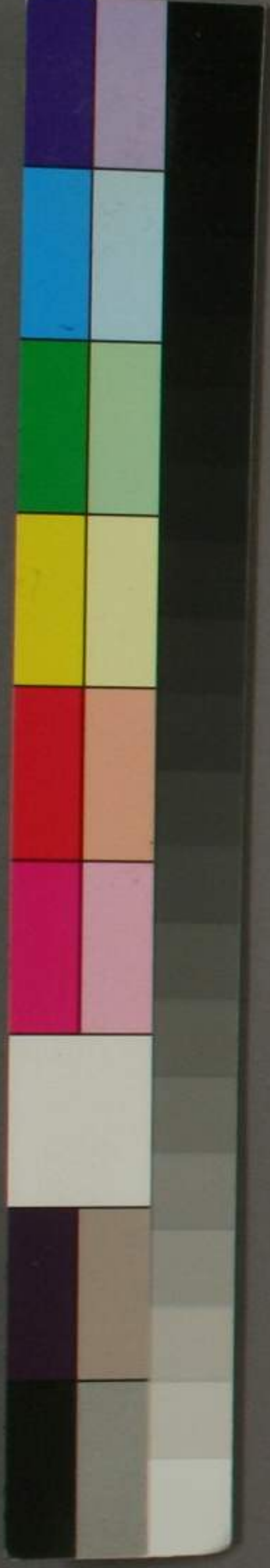


扶桑皇統記圖會
後編
四

遠
2505
13-11



遠
2505
13-11

扶桑皇統記圖會後編卷之四目錄

放巨龜浦島到蓬萊

開王午宮浦島老死條

浦島が子蓬萊小至遊宴歡樂と極る圖

仁明天皇御即位大禮

小野篁派罪の條

伊勢齋宮及建野々宮

恒貞親王隱謀露頭條

小野篁夢小間羅王宮小到了圖

皇統記圖會後編卷之四

目

從豐後國獻白龜

良峯宗貞詠歌道世條

深草の帝の陵諸人群衆の圖

文德天皇御即位

位争名虎良雄角觥條

惟喬惟仁の御位争ひより大内相模の圖

清和天皇御即位

伴善雄犯罪流刑の條

目錄終

扶桑皇統記圖會後編卷之四

浪華好華堂野亭參考

放巨龜浦島到蓬萊 兩玉牛宮浦島老死條

丹後國餘社郡管川と所水江浦島某と呼漁師あり今より三百
余年以前人皇二十二代雄略天皇二十二年の秋七月漁小出々々何國へ在
久其家路小歸され親屬朋友所々尋搜々々曾て行方知れ海
上小難風小遭吹流され又悪魚の爲小これおとち捨れ小
遙小星霜登々今年天長二年八月小故御水江を歸り老死せり幸曾を尋尋小三百二
十二年小及小あさ小不測なる事小都奏聞され朝廷中未嘗有の珍更ありと
て是を記録小載のひたり其義を尋尋小彼浦島某一日漁舟小乘て沖へ出釣
を垂て大いなる龜と釣得たり浦島心小むひん小龜ハ四靈の一小甲ある者三百六

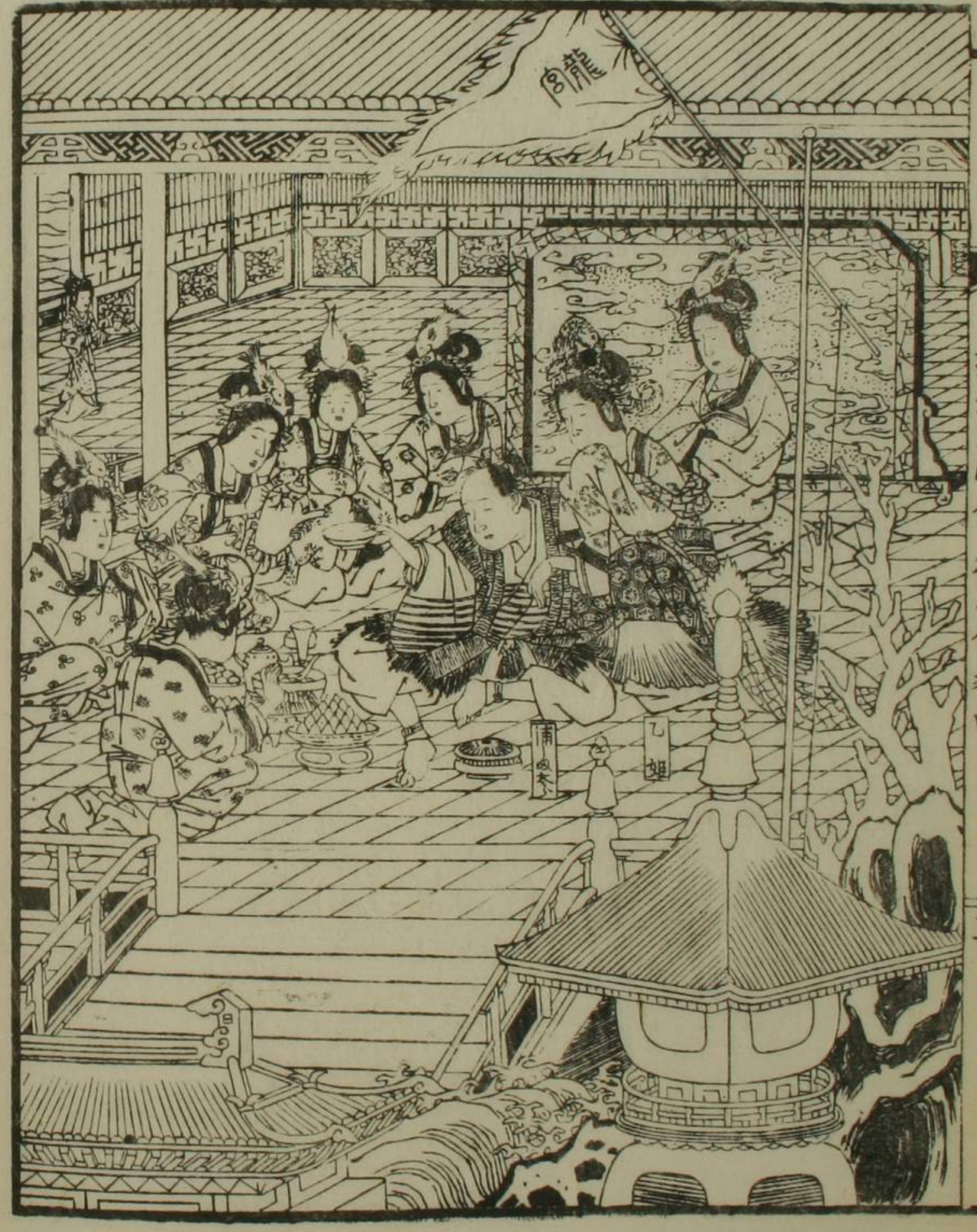
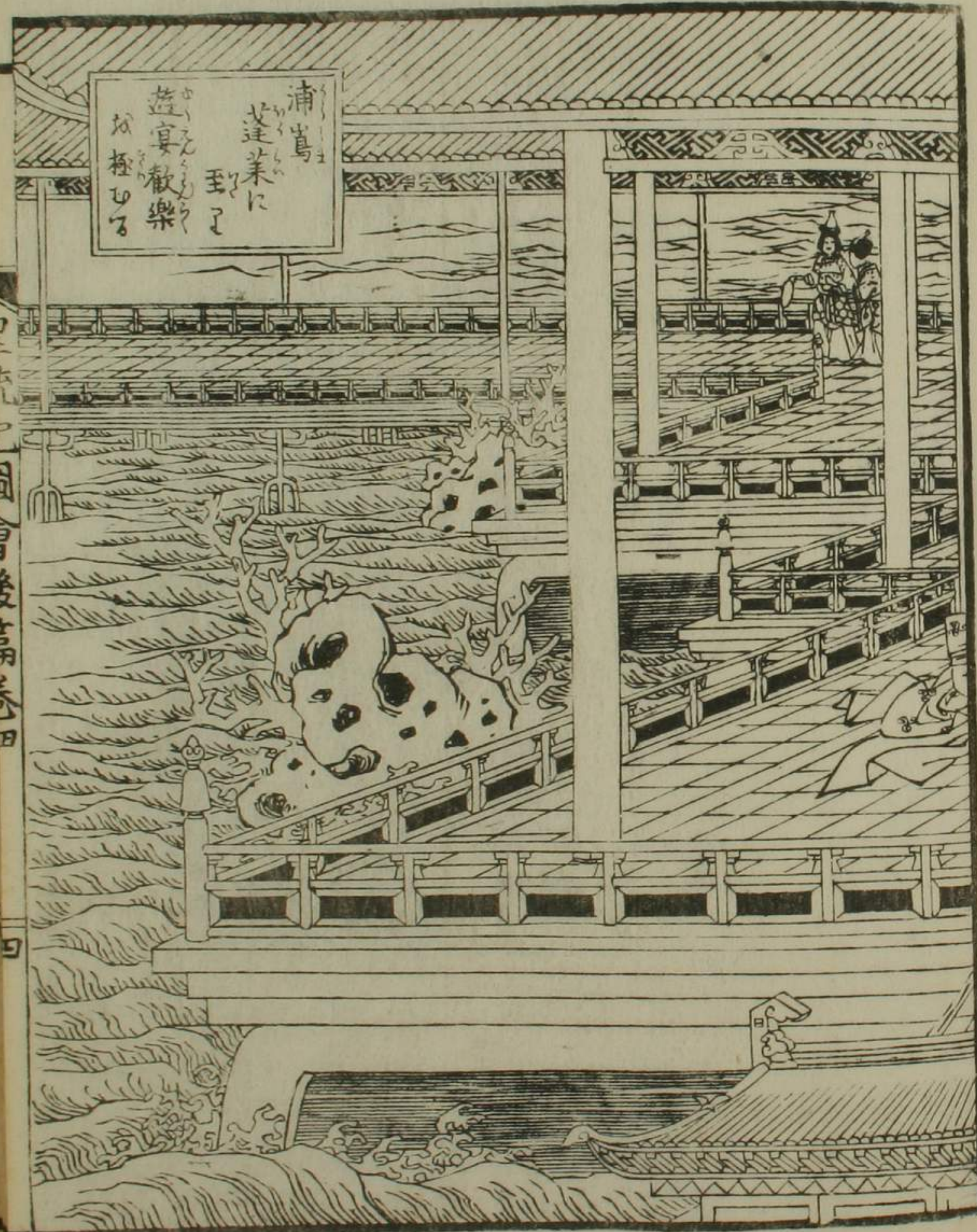


十の長小く齡万幸と保といひゆ芽出度ものから小僅の餌を貪りて釣らるるもど
 便なれ自余の者の針小くらむ。わさ余やとれん我漁を業とせんもる残
 忍ある更を好むも夜も還くもんあは此後敢て釣の餌を喰てかれと言ひ針
 を離して海中へ放ちやれぬ。魚其思を感じ久。三度浮き出浦島を顧
 其後海底へ沈むる。浦島はそれ常の魚を釣夕暮の比我家へ帰る小
 夜半の比戸を叩者あり。推して應て戸を開け一人の女入来りける。浦島は
 を定てはくく見る小容色美麗ある更たさる小者なく身小く列ね羅綾乃
 衣服を著しささく描る天人の如くある。浦島を拜して礼をなす。妻は此國の側
 住者の女にていづか夫小娘をば小世の人の噂小水江の浦島某と正路を
 守り徳徳を好む善人なりとていとて夫が父母脚身を婿がひおせぬ。思
 ひ妻小命て脚身と逆へさせぬ。依て今宵脚逆おまのりぬ。願くは妻と伴ひ

父母の家へ来りゆりゆいと言ひ浦島は女の容貌は心動き更あれ。大い悦
 び前後の思慮も及ぶと頼小承引く。女伴は濱辺に到り小浦島小對ひ
 君まがく目と閉もひまがく目を開たる。更おれと只より浦島其封
 小頃ひ目を閉々る。船小乗海上とて行くとおり更半時たより小して。女を
 け。今、我極家小者より目を開く。浦島服を開てあつとる。草
 の大厦ありて。軒高門閑。麗玉の如く見も列る。草木生く香氣郁とさ
 く鼻と穿小。浦島心はた此國中のる所の有る。不審か。女の列路小從ひ
 て門内へ歩む。住小所小樓閣あり。莊嚴悉く金銀珠玉を鑲。然の帳錦
 幕と垂る。皆瑠璃の橋とて珊瑚の床小上りて。羨の茵の上坐し。風姿艶
 麗ある女數十人出来り。各玉の觴琥珀の盤。其餘種々の器と捧出る。悉く光輝
 透徹する。佳菓珍菜と盛り。席中おる。浦島を伴ひ来り。女

先卮を採て酒宴をす。浦島小島に浦島八尋小島を心地し。玉
 卮をとりて酒を引受喫する。小其味ひ天の甘露もいへる。數の佳者として
 美味あはる。ちく。まうも多々の美女。琴琵琶。彈笛鼓を調て舞。舞ひ自を添
 々も。大い奥に入まむ。卮を重ね。稍酔醒ふ。び々。時女浦島が手と携つて
 錦帳の中伴ひ入。七宝の枕をあべて雲雨のくまひをかり。是より浦島八且夕
 女と膝と交て遊樂。所の殿閣高樓。いりり。小其壯觀。言結小絶。庭前
 小植あはる。梅桃を先とて色々の珍花。一日の中。花咲菓の。風和。小吹。暑
 く。寒く。す。三月頃の時。候の。く。緒の鳥翼も色美く。音鮮。小轉り。い
 い面白。更。喻人。方。た。喜見。城の。采花。とり。是。小。よ。勝。多。く。す。と。思。ひ。り
 あれ。浦島。八。百。念。と。き。ま。ま。昼。夜。珍。饌。美。菜。小。飽。て。樂。暮。と。り。几。三。年。余。小。及
 び。れ。ぬ。不。斗。故。郷。の。更。と。思。ひ。出。し。日。女。向。ひ。我。你。小。誘。り。て。此。館。へ。来。り。早。三。年

を過し。一度親族の安否を訪ふ。故里。歸り。再び此所。来り。永く夫婦の契
 り。成。り。す。一。時。の。暇。を。も。つ。と。言。ふ。女。白。の。ま。ま。所。理。り。あ。る。此。所。逢。葉
 の。都。と。て。容。易。人。向。り。来。る。更。能。か。る。仙。境。な。り。然。も。君。ハ。德。徳。中。り。て。妾。此。都
 へ。伴。ひ。進。せ。り。今。ハ。故。郷。の。更。と。思。捨。て。此。宮。中。小。留。り。女。ハ。長。小。契。と。し。と。練
 當。り。れ。ぬ。浦。島。ハ。只。管。故。郷。と。思。念。禁。が。く。強。て。暇。と。改。玉。々。る。も。女。為。方。り
 一。の。手。宮。と。採。出。し。浦。島。小。子。て。曰。是。ハ。玉。手。宮。と。号。て。此。都。小。二。ツ。と。か。れ。當。り。て。小
 是。を。御。身。小。進。し。せ。い。あ。の。携。へ。り。故。郷。歸。り。再。び。此。都。へ。来。り。又。決。して。此。宮。の。蓋。と
 用。り。更。勿。也。中。過。り。蓋。と。用。む。再。び。此。所。歸。り。の。更。能。か。る。却。て。御。身。小。大
 ある。禍。あ。ら。ず。能。慎。と。整。く。此。所。を。忘。れ。ず。と。言。教。え。れ。浦。島。結。び。て
 玉。手。宮。と。受。取。り。君。の。侍。女。們。小。送。り。て。海。岸。小。い。り。衆。の。女。の。教。小。か。せ。又。目。を
 開。て。何。ぶ。乘。海。中。と。渡。ると。お。更。須。更。り。て。岸。小。着。り。此。時。陸。小。上。り。目。と。開



浦島 蓬菜に 遊宴 散樂 極むる

浦島 蓬菜に 遊宴 散樂 極むる

てこれに乗る船と思ふ大なる亀なり。其後海底沈み行方まればどかりふも
 浦島奇異の物語なり。土地の野山とて故御管の浦なりとも心定堵て我
 家往てんふ家の建ち異りて不知人の住体なり。偕六三年が程帰らるるも
 小他人の住あまふ。親族何某の方往て其家往るれ。是も家造有ふ
 妻りて任人も異なり。是は如何とて又余の親類朋友の家と尋往ても悉く家居
 さふ変り尋る人なき在る也。余の不審ふ地方の人不知此くの人や有と尋れ
 更不知と答ふ。余の問も同じく不知とてあれ信得く一村の人毎尋れ
 とも知る者人もあれ杖かたがりて腰二重なり。旬むらりか弱の来り
 又浦島其公羽を呼ぶ。此所水江の浦島某の親族ある者ぞ知れとて問ふ
 公羽不審げある面色にて浦島と左見右見奇れと問ふ。我々が知れ頃祖
 父たる者の話に遙昔此世の浦の水江に所浦島某とて漁夫有ふ一夜何國

ともわく出行其後不帰親類朋友十日事所方と尋れも所在まればど
 夜釣み出て悪魚ふれ。難風吹流され。のあんとて偕止ると古
 老の物語小言傳とて言れ。其時より七十余年と経る。彼浦島が行方
 ちびかば何百年昔の更も計あれ。其許何由の更と問ふ。やと言
 々る。浦島はての外お話を我と其水江の浦島はよ一夜一人の美女来り如此
 言へ伴れ蓬萊の都へ入へ到り凡三年が程彼所存在。余り故郷のあつ
 今蓬萊より帰る。御身の物語はて數百年昔の更とて。是は何か更と
 更不審とれ。猶公羽根回葉回とて。各かれを為方なく。素より親類の端
 も無れを誰かたらん方か。今何の蓬萊宮へ還んと思ふ。何方の路より往ど
 とも弁へかれ。彼方へ走り此方へ戻り。只忙事とて心も空みちり。致心せ。も仙
 女の誠をもち忘は懐中より彼玉手宮とて出。蓋を開たれば内より煙の如く白

氣空へ立昇と等しく。今夕若く艶中ふんえし浦島忽ち白髪衰老の公羽と
 変り脚痿腰痺て地上へ墮と仆まざるが其後朝日小雪の消るがごとく死し
 ざるぞ不測かりたる。されど歌の逢夜の明る浦島が子の玉手宮中寄てありて
 悔れぬと詠り國初より来りて例に奇変かりたり。異國中も是れ似たる更
 あり。後漢の明帝の永平年中揚州の剡縣といふ所。劉晨阮肇とて二人り者
 あり。平日相伴て山小入藥草と採り市小賣て産業とくたるが一日兩人例の如相
 伴ひて台州府の天台山へ登り藥草を採る小奈何と二人も路小踏迷ひ往と
 もく本の路へ出で己小空腹及ひたれ。桃の葉と把て食し少く餓を亡心と洞川へ
 下り水を手小掬て飲る小洞河の水源より一枚の厄流きりたる由二人相語り曰
 此厄の流来を以て推量を人里ありと覺ゆ。其里往て食をも乞路を尋ん
 ち連て流小添尋往たる漸く二里許過れを聳る巖有る由。其巖殿と聳

登り山を越往む大いなる溪回出たり。然る所小風姿嬋始たる女二人出来り徐小劉
 晨阮肇小向ひ旧織のく馴くく釣をり。二人小名を呼り君等何由来りや
 更の遅りや。疾く妻が家来りて二人を誘ひたる由。二人も路を向んと心悅ひ
 女小従ひ往小程かく巍く大屋小あり。女の引路小就て屋中へ入てる小室中
 の結構珠玉を磨れ錦綉目も文かりたる。兩人頗る心小孩く内數君の侍女
 各羅綾の袂と列ねる杯盤を捧げ出酒宴を促し胡麻飯を勧る兩人酒を
 飲胡麻飯を食す小何れも甘美なる更言語小絶たり。其時所小又錦綉の
 衣裳と著飾する仙女多し入来り女婚を慶賀ととて玉の器小桃実菓子菓と
 盛て贈り俱小酒宴をた。琵琶と彈琴と鼓或ハ舞ひ或ハ舞て日の夕陽小傾く
 まく奥小樂々女客ハ皆醉を尽くと歸去たる。二人の仙女ハ劉晨阮肇と錦
 帳の内へ伴ひて夫婦の交りたり。是より日く百般の珍味小飽く種々の技藝と

あして兩人を慰める由二人も遊真小余念と心も思ひほど半年むくり逗留
したる小常小三月比のどく更寒くも暑くも哀愁る更むち恐懼更
もわし。此一時兩人とも故郷の親兄弟の待ひん更とわし一度故里へ歸り
たれし望々る小。二女が白君等前世の冥福の因てくる仙責へ来る更と得る六
再あり幸福かり故郷の更と思ひど永く這里小居のいと約を竭して抑苗れ
ども兩人を頻ふ故郷憶しわし強て辞をとくる由二女歎息し公等未
塵世の俗根滅せど再び汚濁の人間界へ歸ん更と欲とる為方なりとて
よく小承流し。緒の仙女と呼集て大の酒宴たり。別杯を汲る音樂歌
舞をわけて後入を門外送り出歸る路を積く教市々る由兩人悦ひ
教のゆく行ふ果して常小通ひ路へ出己が家路へ歸る小家のさる有る小
と違ひ万更目別ぬ更のよあれ不審わく我家とわし屋へ入るる小不知人

わく取敢ねむ為方なりと出所と尋さるる漸七世の孫小尋わたりて更
向小其者が曰昔先祖なる者天台山へ入る薬と採し其依歸とせり。今
より二百余年昔の更なりと語る小。劉晨阮肇孩とて大の鶴驚た忍
ち緑の髪も白髪とある若中かほ面も老翁と変。兩人とも地小介ては悲
そくも其後行方まればどかりなると。是滅小倭國の浦島と日日の談や
和漢とも怪れ更も絶てわしと言ひさるるなり

仁明天皇御即位大禮 小野篁流罪之條

天長十年二月淳和天皇帝位を春宮正良親王小讓らせり。御身小西院へ
遷り住せり。正良親王登極し此君を仁明天皇と申奉る是嵯峨天
皇第二の皇子わて御母小檀林皇后嘉智子とて攝諸兄卿の苗裔小政大臣
清友公の御女なり。先帝淳和の皇子恒貞親王と春宮小立の嵯峨天皇を前

太上天皇と淳和天皇を後の太上天皇と崇まらる。左大臣藤原緒嗣有
 臣清原夏野西公方機の政を補佐し。天皇の外舅参議橘氏公卿右大将
 を兼て武官を掌り。天長十年大嘗會を行はば悠紀殿主基殿の旗乃
 紋小栢桐鳳凰日月慶雲西王母の桃連理の具竹麒麟龜龍の飾鮮明小
 大禮の儀式殊更嚴重小執行せり。其年の冬初て檢非違使の廳を置
 と參議文屋秋津を別當たり。是漢土の例に准せり。此職ハ非常
 を戒め政訟小背く旗を穿斃平糶と役たり。漢土唐虞の世ハ理官と云周ハ
 大司寇と云秦ハ廷尉と云漢ハ大理と云隋ハ大理寺と稱し唐の世ハ大
 理寺と云リ。皆吾朝の檢非違使と一般なり。後年朝廷次第小此職重くなり
 左京右京の大夫是を掌り京中宅地の東。彈正臺の掌る不汰亂断の更ハ刑
 部省の掌る訴訟判断断獄刑罰の更ハ左右衛門府の掌る惡黨追捕の役

由皆合せて檢非違使是を掌る中ハ成行歴代重職とす。檢非違使の下小者
 督長といふ役を六十六人令て六十六ヶ國ハ入つとも遣はされ其國の非法と糾
 明させり。是且く於天長十年小改元ありて承和元年とどやる。其正月七日ハ
 豐樂殿中初て白馬の節會を行はる。是より永世恒例とたれり。同三年二月遣唐
 使と渡されんとて其人を選挙し。正使ハ藤原常嗣副使ハ學士小野篁と定め
 る。則ち常嗣篁を紫宸殿召きて脚宴と賜り。時の文人詩客小命て餞別
 の詩文を作せし。亦ハ兩遣唐使小天杯を下され。砂金絹布亦と給り。此の
 往昔より入唐使地中死没せ。輩八人各位階を贈り。其輩ハ藤原清川
 安部仲九石川道益紀馬主甘南備言影紀三瀛掃守宿禰明。田口年富以上八
 人なり。斯て常嗣篁脚暇給りて返中。各旅裝を敷正て。承和三年四月小都を
 啓行し。小野篁と當時双た。博學俊才の人とて。殊小詩歌の達人かれを

今度の遣唐使の正使ハ我々と思はれども藤原常嗣の家系正しく富貴の人なれ
 ば朝廷の官人多く賄賂を得て君より申すも正使不定りども皇心中ハ
 不平の思懐た常嗣の下風小を快くも其の由已不勅命下り上力不
 本意あらず俱不發足して同七月筑前國松浦小着乗船と纜を解くも小海
 上乗出幾干も行くと俄小風変り逆浪起ると正使副使判官録事四艘の
 船を洶上洶下し就中正使常嗣の船撞折楫推あや覆らんせと船子ども
 命と抛て働たよと旧の磯乗着る残り三艘の船も幸じて風難と免と港
 吹戻されども四艘も大破損しれども斯く久唐せん更叶と一旦帰京とや
 とく遣唐使四人がれも都へ還り上り破船の舟を在唐聞小達りしれ今年ハ
 とや年の暮迄寒冷の砌かれも入唐の義延とと仰せ付れる僧其
 聖年聖和三月再び勅命下りるも遣唐使の面々都を去る太宰府へ入り

破船の修復も整ひれども各乗船も多し其期小及び常嗣の船去年難風の節
 大破損しるも修復加れども猶海上に過ち有人更を危ぶむ常の船と
 俄小正使の船と正使の船を副使の船とせども皇心中大不憤り常嗣が我
 々の行余を悪く素快くぬ中あれ急病氣と稱して乗船せむと都へ還り
 常嗣已小出船の期小臨れども皇の代を都へ下さるも迂遠とて従吏判
 官と副使とを出帆せしむ此時唐山の僧圓仁も覺六師一船して入唐せしむ
 去程小野篁歸京して私宅小居し西道端と題号せし文章と綴りて常
 嗣の行余と排榜しるも其文の中朝廷を誑むる文意有るれ嵯峨上皇大
 小逆鱗在使驛小命を召捕せし其罪を緊く弘明させし小菅原
 謝の詞を罪小伏しるも是亦依て死刑も行せむと命を流石博藏及
 能の上輩道の達者詩哥の各人をもとて死罪一等と省られ承和五年十月隱

岐國へ流罪小行れる皇京師を出て物夏配所赴く途中に瀟行の吟七
十韻を賦し。出雲路より船中へ隠岐國へ渡るる船中へ一着の和哥を吟
都の友人のゆゑ遣りける其哥小白

和田のちち八十嶋りけて漕出ぬと人ふ告上海士のはり船
斯く隠岐の配所小著憂嶋守とかりて思送りける徒然小

かのひまや鄙乃これおぼろへ海士の繩とれ漁せんとい

あふ歩敷たて配所小明暮りける承和七年二月都より流罪息免の宣旨
を下されるる皇太子は比日六月帰洛し参内して流罪御免の御札をト上

もれける日八年の七月本爵正五位下小復され日九年六月陸奥の守護小任せられ
日八月都へ還り春宮の学士となり式部少卿と兼日十二年正月從四位下と授

り日十四年正月参議小叙せられ嘉祥元年信濃守と兼仁壽元年の春近

江守と授らる時小管皇病小臥り参内する更熊がうたれた文徳天皇深澤
憐れし妻勅使を以て病を妨せし金錢米穀を給り其年の十月疾病

いせ瘵ざる日小勅使を以て從三位を授る仁壽二年十二月遂小病死せ

る壽五十一歳なり上天子より下庶民のいさまで其秀才を惜まざるはあうり
皇八敏達天皇の苗裔参議正四位下岑守の嫡男なり岑守弘仁の初小陸

奥守小任せられて奥州へ下りける折皇も父小從ひ下りける岑守任満て都へ

歸小おひて皇學業と好まると弓馬の技をの励と學られ嵯峨天皇御食

你博學の岑守が子として學業と勉むと却て弓馬の士とわるは奈何と難く
ひるふと皇勅言小深く慚く初て學小志しける天性の秀才あれ追々學

業上達し弘仁二十三年小甲科の及第し天長十年春宮の學士とあれり元來皇を
其才衆小勝る手跡を習小其師より遙小勝る筆勢と顯し文字と讀小教を



抑勢刃度會郡五十鈴川の内宮御鎮座八人皇十代聖仁天皇二十五年三
 月初て天照皇太神の神靈を鎮祭らせり皇女倭媛命と以て彼宮に之を
 奉らせり是を伊勢の香宮とせり然も其後代々の帝姫御子在り或も
 四海穩りあざと何り中絶。桓武天皇の御宇あり伊勢の香宮とせり思
 召れども此御代も遷都の更なり朝廷の政勢繁く春慮小任せむ事
 亦過さるゝ其後嵯峨天皇平安城万代不易の祈禱のめ皇女有智子内
 親王を賀茂明神へ初て香院小立て神威を仰がせり而して后伊勢香宮
 の義を類ふ御沙汰ありれども時尚いも至るも其義を果しむるを
 を淳和天皇先帝の御志を嗣せり儲そと久子内親王を伊勢の香宮小立
 むんとの春慮定まりあり是も依て先千日禊をむりて嵯峨野小野々
 宮を立入るゝ其御官造貨素と本と黒木の華衣小柴垣を用ひられ御

殿も仮屋小摸一汚穢不浄を忌せり唯不二の神所なれを内外七言の忌言
 然定め左右侍る女官小ま言習せり内七言の忌言ハ
 佛中子 經染紙 塔わらじ 寺尾菅 僧髪長 尼女髪長
 齋斤勝 勝ハ猶 外の七言の忌言ハ 先ハあり 病ヲまず
 哭ヲまわ 血ヲあせ 汗ヲあせ 肉ヲあせ 齒ヲあせ 墓ヲあせ 穢ヲあせ
 抑伊勢の香宮賀茂香院木を神の后小ませむ事あり人あれも左ハ服す
 是神の侍従の義もて神明小奉公させり義かり今國土安全万民安穩乃祈
 乃為かれむも畏るるが御妻かりり。春秋推移り承和も七年小かりり系
 其年の五月後太上天皇和崩御ありし。室葉五十二才。此帝あり
 為さるひて淳和院小任せり。淳和天皇と御謚しむりむり。淳
 和院ハ大内の西 有とて西院とも入り。依て西院の帝とせり。伊勢物語も西院

の帝と書し、淳和天皇の御変なり。桓武天皇平安城を用ひ、大内裡を草創し、時皇子公卿の子息、小学業を勤しむるを勸学院を建り、ひるが指も後代、勤学の便として、大内の東西、小淳和院、尊学院を建り、ひるが博学多才の人を擇んで、宿めの書生と教導せしめ、其別當、大官高貴の人を置たり。是、且、おたは九年七月、小前太上天皇崩御なり。皇孫、年五十五、とて、おたは、此君、おたは、を、おたは、より、嵯峨の離宮に、任せしめ、ひるが、御謚と、嵯峨天皇と、おたは、なり。小前の太上天皇、登遐なり。ひるが、幾年も、経ざる、おたは、後の、皇雲、隠む、ひるが、鏡、周、ち、續、る、を、上、天子、より、下、万民、まで、哀、動、せ、ざる、おたは、けり。然、小、忽、ち、不、測、の、珍、変、出、来、り、る。其、乱、根、を、尋、る、小、淳、和、帝、の、皇、子、恒、貞、親、王、西、院、小、在、り、る。以、春、宮、帶、刀、伴、健、岑、也。但、馬、守、橘、逸、勢、の、輩、天、晴、此、君、を、取、立、ま、し、せ、帝、位、小、即、ち、り、已、く、が、推、威、を、振、り、と、内、隱、謀、を、企

是、彼、一、味、の、武、士、を、う、ま、ひ、時、節、を、志、親、ひ、る、小、淳、和、帝、崩、御、な、り、ひ、る、が、今、日、は、変、を、祭、せ、ま、と、思、ひ、し、る、也。恒、貞、親、王、の、御、伯、父、と、嵯、峨、の、上、皇、猶、小、在、せ、る、是、を、悼、り、大、変、を、思、ま、す、也。おたは、今、年、嵯、峨、帝、晏、駕、な、り、ひ、る、が、今、日、は、誰、悼、る、所、な、り、と、一、味、の、族、を、招、れ、集、め、主、上、 equal 座、を、傾、け、も、ん、と、謀、る、也。おたは、此、昔、後、漢、の、世、小、王、密、と、い、ふ、者、練、叛、を、企、て、る、也。おたは、楊、震、と、い、ふ、人、を、う、ま、し、る、也。此、大、王、王、成、就、せ、り、と、おたは、ひ、夜、密、小、金、十、斤、と、懐、ち、て、楊、震、針、ひ、り、る、也。おたは、金、と、手、て、大、望、一、味、の、変、と、頼、れ、を、楊、震、金、を、押、戻、し、此、隱、謀、四、の、知、者、あり、決、て、成、就、す、べ、し、思、止、り、と、と、練、る、王、密、不、審、時、今、深、夜、に、て、更、小、知、者、な、り、おたは、小、四、の、知、者、あり、と、如何、と、難、い、と、小、揚、震、が、曰、己、小、天、知、地、和、我、知、足、下、知、是、四、の、知、者、有、小、あ、り、と、と、王、密、返、り、と、針、を、赤、面、と、帰、り、由、楊、震、隱、謀、一、味、せ、と、賢、士、の、承、を、遺、せ、り、と、と、る、例、有、と、の、を、健、岑、逸、勢、猶、覺、と、と、て、おたは、おたは、げ、あ、り、大、望

皇統記 卷四

十三

を止て一味をうさひ阿保親王行平業の父をも味方小勸人と密小止の次第と告て
荷擔の義を頼るる小阿保親王の忠貞廉直の人かれを大に孩れ其座を蝕
か小言かり急だ嵯峨の皇太后小斯と言上せられれど太后御孫大方なき
右大臣藤原良房公小就て恒貞親王隠謀の由を奏聞しゆひるるも主事
御驚斜あも甚だ迂驕まり。急だ健岑逸勢を召捕命しと檢非違
使の廳宣下しゆ是小依て堂上堂下小の強動しる。然小健岑逸勢ハ
天討の報とらふ此義と勢もあふ健岑逸勢が邸舎にて圍其を打ち
居りるる早く官兵押寄力者ども乱入四方より取圍し遂に西人を虜小ま
しりる。逸勢ハ抜群の強力かれ近付者と三人抓んで投りられも大勢あり
重り柳へ繩を掛くも逸勢片手小有合碁石を搦もあす秤惜やと罵り眼
を瞋し拳と強く握りられも碁石盡く碎て堂中よりもれ落りる。絨ひい

しれ大かたりる。抑逸勢ハ最澄傳空玄海法と俱小入唐し廣く書経を學究
博也あの上双かれ能書といひ旅力も衆小勝るも由あれ隠謀と思もて
裸世の辱と蒙り配流の身となりる。天魔の所為と疑りれも去程小
健岑逸勢召捕しこれを其一族家人小大に周障し立強くも官吏悉く
榻捕使の廳へ曳くるも猶口類や有と堅く糾問せられも小逸勢ハ踏回小
屈せまと言も白状せられも健岑ハ苦痛不堪のて白状も是小依て大納言
愛發中納言吉野文屋秋津ホを召捕糾明の上官と刺で都と追放し逸
勢健岑ハ隠謀の長本あれ死罪小極りも帝格別の御仁心を以て西人
の死罪を宥めゆひ健岑ハ隠岐國逸勢ハ伊豆國と流罪小行ひゆひる
恒定親王小初より隠謀の義勢知るるより陳謝しゆ其御封偽あす
ゆえなれも其代御封もたうられも猶も御疑を晴しなるとも思召らん

皇正仁心圖會公記卷之四 二五

御髪をわろし出家しゆひ法録を恒寂と名乗るひより世の轉変常
 の妻あが痛く御妻たりたり。儲まは攝逸勢ハ隠謀露頭の変と
 深く憤り配所(嫡せられても)憤念猶止ま終配所おて病死するその
 悪霊都小現れ種々崇となり貴賤を悩める御霊八社の中の神小
 鎮多りのひより是亦依て其崇も鎮りたり

從豊後國獻白龜 良岑宗貞詠歌道世條

承和十二年乙丑小文章博士參議菅原是善卿の北堂男子と生ひる幼
 名を三と号す阿子とも呼ぶひより。後小菅原道真公とや八是なり。御代乃
 御変を次の巻小委く紀せむ茲小略と月十五年戊辰の六月豊後國より白
 龜を献ぐるを帝御感浅くもこれ龜ハ四霊の一なり万年の壽を保つ月
 出度とのかれを元正天皇の靈龜の年号と始り聖武天皇の神龜光仁天皇

乃室龜也皆龜と献りし因て改元有る。其先例小任せ改元と下と勅詔
 ありける小緒卿經義の上嘉祥元年と改元有る。此年入唐せ
 睿山の圓仁歸朝横河小中堂を建せし。儲嘉祥三年庚午二月
 主上御悩小染せしひを白后宮方公卿百官大少致馬た典藥寮の医
 官ハ肺肝と碎れ西方と考て御藥と捧されとも其路其効た緒社緒寺の
 神官僧綱ハ丹誠を凝と細行されも御悩ハ信重せの陰陽の博士が
 占文も頼少く聞えける。後小嘉祥三年三月小崩御なりひより室等僅
 小四十一才小在り。近代明君續りも此君就中寬仁大度の聖王小
 御孝心深く文学筆道を好ませのひ万民を子のごとく撫恤のひ女御
 緒宮乃百官及び緒國の人民嬰兒の母と喪が如く哀慟悲泣するを
 尊嚴ハ御遺勅小任せ深草山蒸り奉られ。日來思電茂業り公

御家の上菴を結ひ陵を守り防圍満々列位都へ還られらるる小独良
岑左少将宗貞の猶都へ還る家上小留り喪小電りけるが哀悼のあり
小一首の和哥と詠ぐる其歌小曰

深草の野辺乃さくく心あをむ此春むく墨染ふさけ

斯詠トれを不思議あるる年々雪と欺くむく白妙小咲一櫻花其年
も薄墨色小咲く実や和哥の徳ハ天地を動し眼小見えぬ鬼神も感
ずむると古今の序小書しも且あるる草木非情としくも宗貞忠誠と
詠哥の至妙なる感して天性の本色と変ト墨染色小咲くをさくく
是より其櫻と世人墨染櫻と呼地名とも墨染の里と号りく昔唐山
亮帝の二人の皇女娥皇女英姉妹ハ舜帝の后小備り潇湘とし所小離宮と
建て住むひくも小虞舜崩御在りく二人の后泣悲のひくも其涙の園

竹小灑るる緑の竹班小漆り班竹とたすく名倭漢國異小古今時はトく

むくく人も人心の城を草木の相感する理一般く借も良岑宗貞花の色
墨染小咲く小涙と感涙と流し小無常と観し遂小髻と剃拂く其時小

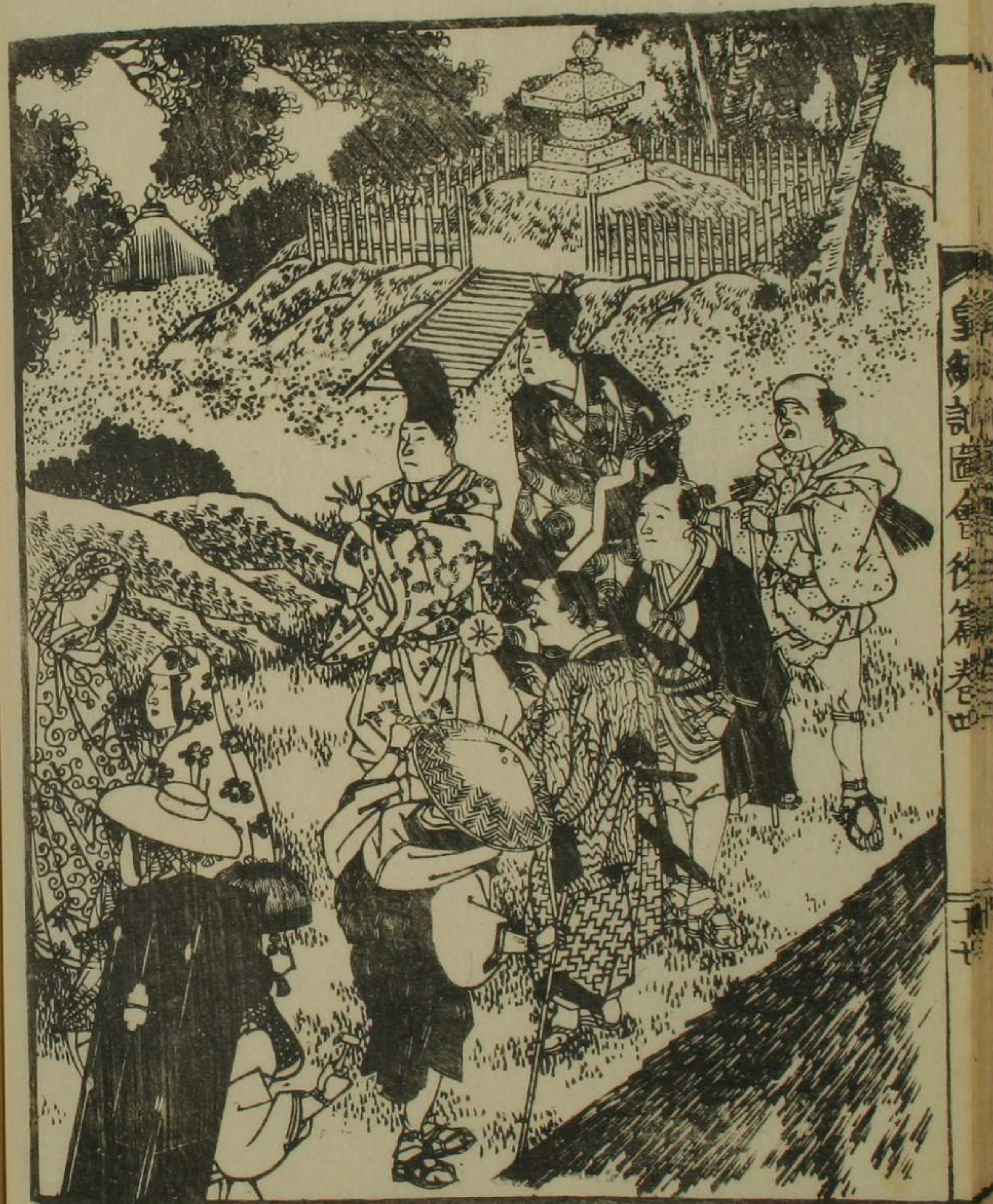
たつらねのうれとてくも鳥羽玉乃我黒髪ハ撫むやあまたん

と詠ト遂小僧とちりたる法名を遍照と号し佛道を修行して諸國を行脚
一後小浴東花頂山小菴と給ひ行ひ澄しと有る小朝廷へ其道徳せえぬ

文徳天皇睿感存し僧正宣と授けしひ也世小花山の僧正とも又僧正遍
照とも稱しる小抑吾朝の世の帝りけれ愚小在さきとも今て嵯峨淳和仁明

乃三帝小御仁徳亮舜も劣りむかひも三綱五常の道平く朝政明小あり
八嶋の果さくも豊小治りけれ後代の龜鑑小とて其御代毎の事實を紀し留め

三代實録と題して今世まで傳りくも難有るも御史たりき



文德天皇御即位

位爭名虎良雄角能條

仁明天皇已不登霞あはれなり。のひを春宮道康親王みちかみ密祚を嗣ついでなり。此君を人皇五十五代の帝文德天皇とす。則ち仁明帝の皇子小御母左大臣冬嗣公の女五條后順子のりを承和九年皇太子みかどす。今年嘉祥三年月帝位みかどす。然も先帝の綜周の中あはれ御即位の大禮、御延引有あはれなり。勅あはれ紹あり。御祖母嵯峨の皇太后御老躰おきな御あはれまを。設あはれせしむ。當帝御即位の大禮を御覽あり。思召早あはれ大嘗會おほなむね執行あはれなり。頻あはれ小申させしむ。月をあはれ年小易日あはれ改て月小易登極の大禮あはれ嚴重あはれ執行あはれせしむ。皇太后此御儀式を御覽あはれ御あはれ意あはれ在あはれなり。御あはれ怒あはれ猶あはれ増あはれ日あはれ幸五月終小薨御あはれなり。此皇太后深あはれ佛道あはれ飯依あはれなり。嵯峨小檀林寺あはれ御建あはれ立あはれあり。世小檀林皇太后あはれ申あはれせり。又曾あはれ禪法あはれ御あはれ心あはれを傾あはれけし。蓮あはれ葉あはれを

と僧を唐土あはれ渡あはれれ。禪宗あはれを求あはれ法あはれせり。九相あはれのあはれ大あはれ妻あはれを觀あはれ念あはれし。むあはれひあはれ兼あはれてハ御終焉あはれの後あはれハ屍あはれと其あはれ野あはれ邊あはれハ捨あはれ置あはれなり。御遺言あはれ有あはれなり。今年先帝崩御あはれの砌あはれニ成あはれのあはれ由あはれ其あはれ義あはれ及あはれと厚あはれ葬あはれり。なり。のあはれ由あはれ小後世杜撰あはれの僧徒あはれ檀林皇太后九相あはれの圖あはれと早あはれく圖あはれ画あはれ小換あはれし。世あはれ流あはれ布あはれす。所謂繪あはれ虚言あはれなり。九相あはれとハ死あはれを七日あはれ小其相あはれ變あはれし。淺あはれ穢あはれた姿あはれと成あはれ更あはれたり。其名貝あはれ新あはれ死あはれ助あはれ脹あはれ血あはれ塗あはれ蓬あはれ乱あはれ噉あはれ食あはれ青あはれ瘡あはれ白骨あはれ連あはれ骨あはれ散あはれ古あはれ墳あはれ以上あはれ九相あはれと

嘉祥三年改元あり。仁壽元年あはれとす。然も文德天皇御あはれ性あはれ質あはれ御あはれ衰あはれ病あはれのてまを御あはれ怒あはれなり。三年小齊衡あはれと改元あり。齊衡三年あはれ小天安元年あはれと改元あり。柳文德天皇小皇子あはれあり。御あはれ坐あはれす。中あはれ中あはれ第一の皇子あはれを維高親王あはれとす。御あはれ女あはれ徒あはれ四位あはれ下左兵衛あはれ佐紀名虎あはれ女あはれとす。

静子とやせり。第二第三姫宮。第四皇子と維仁親王とやせり。御母を大
政大臣藤原良房公の御女明子とや。即ち文德帝の后の御女也。後深殿の
后宮とや。此の后は。時の第一皇子維高親王。天性温順。柔和平。且又聰明
睿敏。不在。帝の御寵愛。他小勝り。此皇子と春宮小玉とや。思召け
る小紀名虎。我孫の妻なれど。一の宮と太子小玉とや。頻小内奏。帝ハ
いよ。御心傾。已小維高君を春宮小玉とや。其御沙汰有。源信。練
奏。聞せられ。二の宮。名虎の女の生む。所。て。落腹。腹。在。在。太子ハ
唐慮。心。あ。ぎ。魚。を。も。ん。弟。四。宮。維。仁。親。王。と。正。后。腹。小。生。れ。り。を。此
皇子と春宮小玉とや。更正理。て。い。と。り。帝。も。信。が。練。奏。二。理。あ。れ。を。強。て
一の宮と太子小玉とや。更。も。能。せ。む。と。死。と。唐。慮。を。定。む。の。群。臣。と。召。集。て
兩皇子の中。何。れ。を。春。宮。小。玉。と。や。と。勅。問。せ。る。小。列。位。其。身。の。具。原。小

引付一の宮と太子小玉とや。順道。て。い。と。り。あ。れ。不。口。一の宮ハ。御。母。卑。な。れ。后。腹
小御誕生。あ。り。四の宮と春宮小玉とや。奏。す。も。有。て。評。議。更。ハ。一。決。せ。れ。り。君
も。困。下。果。り。此。上。神。慮。お。任。せ。て。春。宮。と。定。ん。と。八。幡。宮。小。於。て。臨。東。の。祭
み。わ。き。り。十。番。の。競。馬。を。催。さ。せ。其。勝。劣。を。以。て。太子と定ん。と。勅。詔。あ。り。小
依。て。勅。命。の。如。く。社。頭。小。於。競。馬。を。行。な。る。四。番。一。の。宮。方。勝。五。番。四。の。宮。方。勝
今。二。番。持。つ。て。勝負。久。と。と。名。虎。強。て。二。宮。方。の。勝。小。せ。ん。と。種。々。故。障。を。や
ま。る。も。逐。小。勝負。互。角。小。なり。を。何。れ。の。白。玉。子。と。春。宮。小。玉。と。や。た。中。り
も。か。く。緒。卿。と。や。評。議。此。上。禁。廷。小。於。て。相。撲。の。節。會。と。行。れ。其。勝負
小。依。て。儲。君。を。定。り。と。奏。聞。や。れ。帝。御。行。客。在。し。ま。も。角。觴。を。定
よ。と。勅。詔。あ。り。是。小。依。て。定。日。と。極。め。火。急。小。緒。國。の。相。撲。男。と。召。上。一。の。宮。四。の。宮。方
と。い。ち。ち。相。撲。の。關。ハ。維。高。方。ハ。紀。名。虎。維。仁。方。ハ。伴。良。雄。と。い。定。す。り。多。紀。名。虎。ハ

年ねん齡れい五十七ごじち才さい稍しやう老らう年ねん小せう及およも天性てんせい無む双そうの大だい兵へい小せう及およも身材しんたい七尺しちせき力りき六十ろくじゅう人にん力りきと兼かねする強かう力りきもれを望のぞ主人しゆじんで今こん度どの頭かぶ小せう三さん寸すん作しやく良らう雄ゆう八はち生せい年ねん二十にじゅう才さい身材しんたい五尺ごせき六む七しち寸すん力りきも尋ゆん常じやうを好かう生せい得とく相しやう撲ぼくを好かう野の見けん宿しゆく称しやうより定さだむる投な取と兼かね檢けん遊ゆうホほ四し十八じゅうはち年ねんの裏うら表へをよよ熟じやく煉れんくくれを各おの虎こ何なにむも力りきありとも何いづ程ぢやうの裏うらああんとんと是これも望のぞんで頭かぶ小せう三さん寸すん抑おさ角かく触しやくハ天てん空くう震しん且かつも其その起き源げんありも吾われ朝あつて八はち建けん御ご雷らい神しん建けん御ご名な方ほう神しん力りき競けいの更さら奮ふん斐はい小せう足そくえり是これも角かく力りき乃なり起お源げんとと緞じやくをを人にん皇かう小せう三さん寸すん乃なり十じゅう代だい垂すい仁にん天てん皇かう七しち年ねん七しち月げつ大だい和わ國こくの任にん人にん當たう府ふ躰たい速すみと出い雲うん國こくの任にん人にん野の見けん宿しゆく称しやう始はじめて力りき競けいををとと是これも人にん代だい相しやう撲ぼくの温ぬ筋ぢんなり去さりわりとと未み禁きん廷てい小せう相しやう撲ぼくの節せつ會かい行ぎやうれ武ぶ家か町ちやう家か農のう家か小せうもつもつ此こ枝えだを好かう者ものまま是これも且かつされ維い高かう維い仁にん兩らう親しん王わう方ほう小せう今こん般ぱんの角かく力りきとて王わう位ゐと定さだむる大だい更さらもれを等とう雨うふてハ叶かなふと佛ぶつ力りき難なん護ごを頼たのむハ不ふ知ちと一いつ宮みやの御ご方ほう

小せう柳りやう本ほん紀き僧そう正せい真しん清せいを祈いのの師しと頼たのまれ四し宮みやの御ご方ほう小せう延えん曆りき寺じの惠ゑ亮りやう和わ向かうと良らう房ぼう公こうと兼かねて師し檀だんの睦むつ深ふかく今こん度どの祈いのの師しと頼たのれり身み小せう依いて惠ゑ亮りやう之これ脊せき岳がく西せい塔たつの密みつ幢ちやう院いん小せう檀だんを構かまて大だい威い德とくの法ほふを修しゆせられ真しん清せい東とう寺じ檀だんを致いたして降かう三さん世せいの法ほふを行おこなひ兩らう僧そうとも多た年ねん修しゆ行ぎやうの法ほふと尽つく獲とく摩ま率すうの煙えん小せうたれて肝かん膽たんと確かくた祈いのられり去さ裡り小せう相しやう撲ぼくの定さだ目め小せう由ゆかりん朝あつて紫し宸ちん殿でんの前まへ小せう用よう力りきの場ばをりま御ご門もんの東とう西せいの回わい廊らう小せう五ご彩さい凝ねい子しの幕まく步ふ間まとて力りき者もの乃なり面めん幕まくの内うち外がい小せう陳ちんり坐ざす今こんの角かく力りき海かいハ因よ小せう日にちカ者ものの勝かちまま者ものハ幕まくの内うち小せう坐ざり次つぎある者ものハ幕まくの外がい小せう坐ざすり今こん上かみ六む枚まいの力りき者ものと幕まく内うちと六む十じゅうの幕まく内うち小せう坐ざりたる例れいを以もつてりやん偕あつて紫し宸ちん殿でんの上うへ座ざ小せう出い却せつたりも御ご簾れんの内うちより層そう見けんありも左右さうぶの大だい臣しんちり月げつ御ご雲うん客かくハ左右さうぶの陛へい下げ小せう糸いと列れつして見けん物ぶつハ維い高かう維い仁にん兩らう親しん王わう之これ枝えだ

善雄早く身と捻りて拔名虎が背へ廻り双腕の力を充て突倒さんと押さ
 ぐれども名虎の地より生抜る大盤石の如く一歩も動くも大手と背へ廻りて
 善雄が首筋と駈馬楯中我前へ曳廻り金剛力を出し肩骨と執り拉んと
 す。されも善雄が抜群の角力の達人なれども大木小藤の捲付しと取付て
 内へ外へ大渡緊小渡緊左手小廻り右手小廻り或は離れあひの等
 虚く突くの妙手と尽して緑りたる是や昔より角力の上手と名高た品治の
 北男佐伯希雄紀の勝因も。善雄が早業小争り勝るをたと諸人感
 嘆し矚目と離まらず行唾を吞でるうち小名虎は善雄が為小澤とて大い
 小精力を方し勢の稍衰へ息づく早鐘を撞か如かりたる所小忽ち民の
 方より彼大威徳明王の水牛の吼る声ゆえて名虎が耳小入とひひく俄小放
 心せし忙とて我を忘と双腕も痺るごとく覺る。善雄は水牛

の声を定ていよく勇氣を増名虎が下半小入と押さく憤鼻禪小両手をか
 るごとくぐる回もなく曳やと言さぬとて倒れ投付るをさうも名虎其後
 血を吐て起も得とぞと介伏る是を堂上堂下小群ア雑人小の追
 仕りやと譽る声聖見小御音れて少時ハ鳴も止まら。立合の臣令持る
 幣と善雄小授られ善雄ハ幣と受て推頂を飲とて玉座小向ひ拜を
 て旧の椽座へ入り。官人們の五人入りて名虎と扶け起し。幕の内へ連行乘
 乗て其後館へ送りるが三日許病牀小病卧只無念や朽惜やと嘗り叶
 て終小空く成ふる。朝廷ハ四の宮勝負小勝多むとて維仁親王へ立太子の
 宣上と下され維高親王ハ二月二日君の御前へ御元服あり。理髪ハ中納言
 長良加冠ハ左大臣信公なり。斯て其翌年天安二年八月帝御怒頼あり遂
 小山崩御たりのひれを皇后宮方公卿諸官人小至るを深丸敷小沈みあり



大内相撲の圖
 惟喬惟仁
 此位争
 大内相撲

大内相撲の圖
 七五



伴ノ吉雄

伴ノ吉雄
 大内相撲の圖

儲者果多々更あねむ。御遺勅小任せ尊嚴茂収まり山城國葛野郡真原の山陵小葬りなれり。此君も御先々の帝の御仁徳小劣らむむと御即位の初より朝政小睿慮を委むひ万民を恤む育多ひ四海穩たり多小御在位ころ九年小て登霞すり多。宝篋三十二を最惜り御更へたり

清和天皇御即位

伴善雄犯罪流刑之條

先帝德己小山崩御かひひくれも朝廷の群臣評議の上春宮維仁親王を皇位小即奉る。此君を人皇五十六代清和天皇と申されり。御年九才五朝幼帝の始なり則ち文徳天皇弟四の皇子小て御母太政大臣藤原良房公の御女深殿皇后あり。此時外祖良房公を摂政とせしむ。是は藤原氏摂政の初なり即ち良房公の針らひとて伊勢太神宮を先と諸大社へ奉幣使を立幼主御即位の義と告られ。年号と貞觀元年と改元ありり。然れども

年始の節會および諸の儀式ハ綜圖の俾り小て行れどよく冬小より十

一月小大嘗會の大礼を執行れり。此君ハ勝れて聰明睿智小在り御幼少より学问を好ませゆひ太学博士春日雄繼小孝経を受むひ自今テ

以後帝王の人多く必ず讀書する始小ハ先孝経を讀べたりと勅詔ありむひり。諸臣下奉りて幼主小ハ似合せむと賢丸倫言ふと皆古

文卷てと心入りり。これを末代とて帝王の御讀書始小孝経と讀のよ

ま此帝の勅詔小因とると。斯聖智の君を自ら負觀三年辛巳十二才小く自周易と講じり相國良房公と首と月卿雲客参列して拜聽

くなると。偏小菅家江家の博士の講する小異あらずと感もなむ。其後も論語五経群書治要等文を講じり。此君のてり御幼稚より御更へり天子も明君ありり。此君のてり御幼稚より御更へり

兼備りのふ君は在ますとあり。貞觀六年正月元日小天皇御元服はる。御年十五才ふあせり。日八年丙戌三月十日の夜内裡の應天門放火乃とめ小焼失したる也。諸卿大臣其犯人を撃穿ある小更小知さるる。其後小辨人あつて大納言伴善雄が所為ある。頭と即時小召捕まると。其根と引く小伴善雄は去ぬる天安元年位定の角小勝る。公以て相國民房公殊更小目願負あつて善雄を重ん。追く官位を増遂小大納言小任せられ。其小彼紀名虎小前小迷し如く曠の角小負ると深く遺恨小思ひ氣病を設て遂小病床小憤死し。其惡靈の祟小や伴善雄天性慎深人かりたる小何時し。驕慢の心萌。身行跡小前小変て甚しく家士奴婢と科あれ小官。六人の貪賤を嘲り。今富貴と妬とる也。諸人善雄と憎疎へする。小成行れども。それのまも心付す。あれ大臣の高官小昇進

せむと非分の望を起し自己はしく思ひ。當時左大臣源信右大臣藤原良相なり。我手段を廻し信を罪小落さむ良相を左大臣小擲せ。右大臣いさづめ我を任せむと。身勝手のを簡を定め浪士大宅産鳥取と。嗚呼の曲者と。暗小内裏の應天門小火をきせむ。小忽ち焰と燃上り。是小依て衛府の官人下司小大。強た地聚て火を消んと。僅けも大勢強く遂小應天門焼失し。其も自余の殿宇小幸小別条。檢非違使乃別當吏の体をより。檢る小平く犯人有て火をき。たる小糸あ。是隱謀を企る族の所為。り。人夫を四方へ配り浴内浴外も。嚴く擊穿し。れも何者の所為とも。敢て分明あ。善雄は仕。一日右大臣良相の館へ到り。對面して声を低め。應天門小火をき。たる犯人を誰あ。んと思ひ。ひ。小豈と。左大臣信の所業。なり。と告る者あり。察する。小彼人謀殺を企。帝と傾け奉

つらふんもあやう急死官吏を差向召捕せし明あぐと天逆す小誠く
告ぐる小ど良相偽言ハ勢中あさふの外小孫た能くと告知されしと一應
の思慮中及ぶと善雄と曰道と陣の座行棧婚る参議中将基経と呼
出。左大臣信逆謀を企應天門を焼るは其せえあう急死官吏と
向搦捕せしと命せられし小基経若年あれも思慮深た人を皆考
て曰此義相國良房公ハ知れりやと向せられし良相答す否良房公も此程
一向佛道を皈依あうて朝廷の政教とせむをさう小依ていす告知さす
されし小基経色と平。是ハ無忽ある仰ふ火災の義ハ小吏とつりし左大臣
とる人を召捕ハ天下の大事かり。並小棋政とる小告す官吏と差向る法や
ハ必れ小臣相國小言上ハ下とて直小良房公の館へ推奉。右の由言上せ
られし。良房公大い孫れ先帝一宮と四の宮と何方と太子小三とと群臣小向

せし時諸卿多ハ一の宮を太子小三とて奏しかれも彼信入ハ右腹と外
感腹の理を論じて強て今の帝と太子小三とを練られし遂小四の宮へ太子の宜
旨と下され先帝崩御なり。後諸卿詮議。四の宮春宮とて在せし御幼
稚とハ兄皇子と起て脚即位。ハ如何あんと風評せし折も信一人の道理
を演て幼君を帝位小即奉り。程の忠臣何と逆意と企つる吏有。此當時
信小増る正直の功臣かり。近頃急忽のやれ吏右大臣ハ似合ざる義かり。極
強者の虚言あう。克理非を糾さる。とやされしと有る。又基経左中右と
承伏し。至るて良相善雄ハ相國のやれ趣を言交せられし。良相ハ理小伏と
赤面。善雄ハ何となく底氣味あう。よれ程小言終て。歸りたり。其後朝廷より
放火の犯人を探り尋らう。吏條。とる。猶曾て知ざりし。小月日遙小推殺り
同年八月三日右大臣良相の館へ夜中怪の下即入。入来り。執達の役小就。と

三ノ言園會後存卷四
二七

言て雲霧のく消失いへ亡霊の教お任せ斯所人出ゆなり。可憐此即思賞小
と某が一命と御助下さる下と。微細小白状い多小と。右大臣も名虎が執着を深く
怖と毛孔も堅く思れ此六基経と商議一善雄父子と召捕人。雁鳥取ハ
澄人のあ一室小隠し置て番人を以て守せ。夜中か使者ときて婿基経を
招れ對面の上雁鳥取新の趣を結られ。基経眉をひとら古より執着
深れ者の怨鬼恨を報し例和漢とも少くす。並に名虎が亡霊善雄小放心
させく罪を犯させ義も無例とや難しといふも言を近天の新人。應じて其
約を信するも慮りの不足小似たり。小臣今應其者小對面一実否とこれ下
として雁鳥取を呼出。自身弘明ある雁鳥取が白状良相のやされ趣を二句も
違と其五言虚言あらずさす一む。此上善雄を召捕罪の虚実をいさんと
良相小辞を告て私宅へ帰られ多小夜も早明よりこれ火急小南淵幸名

藤原善繩兩人を呼寄伴善雄父子大罪を犯せり急死地向て召捕しとて官
兵二百余人を授けられ兩人領堂一官兵を率して善雄が邸舎地到りまご
卯の刺の早天小表門裏口を取囲。後勇の力者我後と前後の門を打破てど
えれ入る。善雄いす寢所小別て在る多小俄小官卒のく入小強た是ハ何吏の
起しとて岸破と刎起太刀追くる間も十余人の力者寢所へ踏込。ち重つ
く難かく繩を掛りりり。善雄が嫡男善佐ハ早密謀洩しりと察し。家士五
人を引將太刀と揮矛と揚て表門へ突出。官兵を斬散さんと働けとも年各大
勢小下知ハ方より攻まさせれ。善佐が即黨或ハ討ま或ハ重手と負多小。善
佐叶がと再び館へ引退れ自害せんとする内小官兵引續てこ入手とり脚より
して是れ安く搦捕多。館の女童ハ泣叫びて逃さるよ。男子も者れ火急の妻小
周障狼狽途を失ひ多と年各善繩諸率小令して又く搦捕せ善雄父子と

と申史廳と申一より多。基経善雄父子と庭上小曳居させ放火の科を礼明
 せしむる善雄教く寛多に陳謝する小依被鷹鳥取を曳出させて對論させ
 られ善雄忽ち言句小結り終罪小伏し多ふより紫く禁獄させ借相國良
 房公斯と言し多れを兼て具員の善雄が義を相國六大小後れ彼仁生得
 忠直の性多ふ何多する大罪と犯し多と當罰あり多れも我と白状せ上奈
 何とも志がく大切なる禁門火をけり大罪を犯し死刑極るとも亦小功あり
 以て相國種々基経を説きわめ死罪一等と借善雄六伊豆國善佐の續岐國へ
 流罪小し其余の族十余人も尽く流刑小所せられ家士も罪の重小依て多
 小刑法と定め就中浪士鷹鳥取の善雄が頼とハも御門火をきたる大罪の上
 己が慾心を逐せるとして斬人小出し余不義表裏の國賊なりとて重く死刑小ぞ行
 らる。滅小今度の珍更の起る名虎が憤靈の祟也と諸人奉て白ざる無りたり

扶桑皇統記後篇卷之四畢

